

Newsletter

May 2017

<http://www.aack.or.jp>

目次	
ナンガマリⅡ峰初登頂	図書紹介
森本悠介1	私のシュプールⅡ 山とスキー、人との出会い 横山宏太郎.....7
乗鞍訓練（1956）について	会員動向8
横山宏太郎.....4	編集後記8
近藤公夫君追悼	
斎藤惇生6	

ナンガマリⅡ峰初登頂

森本悠介

概要

2016年9月～11月にかけて行われた、日本山岳会関西支部の80周年記念登山に参加し、未踏峰であるナンガマリⅡ峰（6,205 m）に初登頂した。

登山隊は、重廣恒夫隊長と9名の隊員から構成され、6,000 m 峰への全員登頂と登山技術の伝承を目的に、北東ネパールのチベットとの国境稜線にあるヤンマ谷奥の山群において、未踏のナンガマリⅡ峰からナンガマリⅠ峰（6,547 m）への縦走を計画した。

結果は、登山行程の遅れのためⅠ峰への縦走はかなわなかったが、Ⅱ峰に隊長と8名の隊員が初登頂を果たした。

はじめに

ヤンマ谷奥の山群は、カンチェンジュンガより北西のチベットとの国境稜線に広がる。7,000 m 峰こそないが、未踏の6,000 m 峰が多く残っている。天気さえよければ、ゲンサとヤンマを結ぶナンゴ・ラから、ピラミダルな山容が美しいナンガマリⅠ峰と前衛峰の一つであるナンガマリⅡ峰が望めるだろう。

この山群に関する記述として、最初期には1847年～1850年のジョセフ・ダルトン・フッ

カーによる植物調査や1879年のサラット・チャンドラ・ダースの密入蔵時の記録がある。これらに続き、1962年には中尾佐助隊長率いる大阪府立大学東北ネパール学術調査隊が調査し、1963年には東京農業大学東部ネパール学術調査隊第二次隊、日本鱗翅学会のヒマラヤ蝶蛾調査隊、東京都立大学山岳会大阪府立大学山岳会合同東部ネパール学術調査隊が立て続けに調査している。特に東京農業大学東部ネパール学術調査隊第二次隊と東京都立大学山岳会大阪府立大学山岳会合同東部ネパール学術調査隊はそれぞれ独立にヤンマ谷の地形を詳細にわたり解明した。

日本人の活躍により、先進的な学術調査がなされ、全容が明らかとなった山群にもかかわらず、後の出版物である「ヒマラヤ名峰事典」では、ナンガマリⅠ峰がツェツェ・カンとして紹介され、峰の位置にも誤りがある。また、ナンガマリⅠ峰に初登頂した2010年10月ニュージーランド隊は、2015年に修正されるまで、ナンガマリⅠ峰を同峰から東に2 kmずれた位置にあるパブク・カンと間違えていた。このように、ピラミダルな形が特徴的なナンガマリⅠ峰さえ、現在に至るまで正しく認知されていなかったことが伺える。



写真1 BC対岸から眺めたナンガマリⅡ峰南面。写真左のピークがナンガマリⅡ峰。写真中央、左側のモレーン丘最奥にC1、その上部の氷河上にC2を建設した。

登山記録

BC～C1

9月29日、ナンガマ湖下流の標高4,850 m付近の牧草地にBCを設営した。周囲は放牧地としても利用されているだけあって水場も近く快適であるが、予定より標高の低い場所でのBC設置となった。続いて、9月30日～10月5日にかけてC1建設を行った。3名が偵察隊として、ルート工作を行いながら先行し、残りの者が荷揚げを行うという要領である。BCから右岸の河岸段丘を突き当りまで進み、ナンガマ湖脇の標高5,100 mにC1を設営した。偵察では水場探しに苦戦していたようだがガレをど



写真2 C2から見たナンガマリⅡ峰南東面。写真中央のルンゼを挟んで左側がナンガマリⅡ峰、右側が小ピーク。写真右端のナンガマリⅠ峰・Ⅱ峰のコルから裏側へと回り込み、ルンゼ上部にあたるⅡ峰・小ピークのコルに出た。そのまま稜線を伝い、Ⅱ峰頂上に立った。

けて、伏流している小川から水を汲めるようにしたようだ。この期間中に偵察隊は、さらに先のスラブ岩壁の途中まで進んでいた。

一方私は、BC入り前にも体調を崩していたのだが、BCに入って再び体調を崩していた。発熱があり、食欲はない。ようやく登攀期間に入ったのに、出鼻をくじかれひどく落ち込んだ。私がテントで休んでいる間も、偵察、荷揚げの準備と登山は進むので、一人置いて行かれる気持ちだった。幸いなことに、BCで2日間休んだ後から、なんとか体調を取り戻し荷揚げに参加した。標高5,000 mにおける活動で、程度の違いこそあれ、皆高山病の症状が出ていたらしく、C1建設が完了する頃には、体調を大きく崩しヤンマまで下る者もでた。それでも遠征は粛々と進み、私も自分の役目に専念した。

C1～C2

10月6日～15日、登山の段階はC2の建設に移った。C2は標高5,600 mの氷河上に建設したが、C1から距離が離れていた。C1から右岸側の斜面を登り、カールのガレ、草付き斜面、スラブ岩壁を経て、ようやく氷河が確認できる。実際に進んでみるとカールには不安定な岩が堆積しており、アップダウンもあるため、ここの通過で体力と時間を消耗してしまうのだ。スラブ岩壁の方は大した傾斜でなく歩いて行けるので、スラブ岩壁の前後に荷揚げの中間デポ地を設けた。タクティクスはC1建設までと変わりなく、偵察兼ルート工作隊と荷揚げ隊に分かれて行った。ヤンマでヘリを呼ぶ事態となるなどのトラブルもあり、荷揚げは遅々として進まず、10月15日になってようやくC2建設が完了し、そのままC2入りした。

このとき、私は偵察兼ルート工作隊として、フィックスロープを張っていた。先行して氷河の上から先も長いと分かっていただけに、隊全体がなかなか進まないことに対して辛抱せざるを得なかった。それでも、行動できないような降雪日は10月11日だけといった具合に、天気に恵まれていたと思う。

C2～登頂

登山はいよいよ最終段階となった。キャラバン日程を切り詰めるとしても、残る登攀日数は5日であった。C2からⅠ峰までは標高差にし

て約 900 m、Ⅱ峰までは約 600 m を残していた。Ⅱ峰からⅠ峰への縦走にはキャンプがもう一つ必要であるが、残りの登攀日数を考慮すると無理な話であった。タクティクスを切り替え、Ⅱ峰の登頂に的を絞ることにした。それでも、C2 から一気に登頂を狙う必要があるため、この時点ではⅡ峰への登頂も危ういと思っていた。

10月16日、昨日荷揚げを頑張ったためか、体が重かったが、雪の上を歩いていると、ヒマラヤに来たのだと気分が高揚していくのを感じた。傾斜のある斜面ではフィックスロープを張り、傾斜のない場所ではコンテニューアスビレイに切り替え、ナンガマリⅠ峰・Ⅱ峰のコルの下まで進んだが、10月11日に降った雪が雪崩たのだろう、コルに上がるための斜面には表層雪崩の跡がみられた。隊長判断で、日を改めることとなる。

10月17日、朝2時に出発。外は冷え込んでいたので、ダウンを着込んで歩いた。昨日と同様、歩き始めると存外に体が動くことが嬉しかった。フィックスロープを張りながらⅠ峰・Ⅱ峰のコルへ上がると、西にはエヴェレスト、ローツェ、マカルーが望める。60度ほどの急雪面を登りⅡ峰手前の小ピークの肩を越した。さらに、先ほどの小ピークとⅡ峰のコルから稜線に出て、交替でフィックスロープを張りながら頂上直下まで進んだ。確保したまま雪庇を越え、ナイフリッジの頂上に全員集合。時間が押していたので、うれしさに浸る間もなく下り始め、そのまま逃げ帰るようにC2まで戻った。

遠征を終えて

真っ先に思うことが、高所順応に苦戦したということである。以前 6,000 m 峰に登頂したときの経験から、事前の準備として富士山に 20 回以上は登ったが、今回は 4,000 m から高山病が出た。新たな高度を獲得しないと効率よく順応できないように思われる。

隊としては、記念登山ということもあり、実力も経歴もバラバラの者が集まった。その中で全員登頂という目標を掲げ、隊長と 8 名の隊員が初登頂を果たせたことは、重慶恒夫隊長の的確な指示もさることながら、ルート上に登攀要素が出てこなかったこと、10月11日以降は晴天が続き天気にも恵まれたことであろう。今遠征でやったことは、8,000 m 峰を目指す者から



写真3 小ピークの肩を目指し急雪面を登る筆者。60度程度の傾斜。北面で気温は低いにも関わらず、ラッセルとなった。

したら期間も行程も3分の1に過ぎない。粗削りな登山隊であっても、6,000 m 台の未踏峰なら登頂を狙うことができるという良い実例となった反面、それより先を目指すには、隊としてそれ相応の訓練が必要不可欠であることが改めて認識される結果であろう。歩荷に、ルート工作に余裕をもってあたれること必須である。

最後に、何よりも収穫であったのが、未踏峰や未踏ルートについて考えさせられたことにある。例えばカンチェンジュンガにしても、シッキムのゼム氷河、タルン氷河からのアプローチはなされていない。実際は、単純な話ではないのだろうが、探せば新しいことはあるのである。

参考文献

フッカー、J.D. (1854) 『Himalayan journals; or, Notes of a naturalist in Bengal, the Sikkim and Nepal Himalayas, the Khasia Mountains, &c.』J. Murray.

ダース、S.C. (1902) 『Journey to Lhasa and Central Tibet』 J. Murray.

中尾佐助 (1963) 「東北ネパール 1962 年：ヌプチューの登頂」、『山岳』第 58 年, pp.63-87, 日本山岳会.

ヒマラヤ蝶蛾調査隊編 (1964) 『青いけしの国：蝶のふるさとヒマラヤ』講談社.

菰田快 (1965) 「トゥインズの試登—エヴェレスト—カンチェンジュンガ間の空白部の踏査」、『山岳』第 59 年, pp.57-71, 日本山岳会.

平野征人 (1965) 「シャルプーの登頂と東北ネ

パール山群の踏査（一九六三～四年）, 『山岳』第59年, pp.72-119, 日本山岳会。
藤田弘基編(1996)「ヒマラヤ名峰事典」平凡社。
Macartney-Snape, Tim, (2011)「Pabuk Kang (a.k.a. Yangma, 6,244m) Southwest Ridge」, 『American Alpine Journal』vol.53, pp.337-339, The Mountaineers Books.

Popier, Rodolphe (2015)「Pabuk Kang, Correction」, <<http://publications.americanalpineclub.org/articles/13201213287/Pabuk-Kang-Correction#>> (参照 2017-5-25)。
重廣恒夫(2016)「ナンガマリ登山を終えて」, 『関西支部報』No.166, 日本山岳会関西支部。

乗鞍訓練(1956)について

横山宏太郎

一冊の写真集がある。「日本南極地域観測隊員総員集合」という。「第1次隊から第25次隊まで」という副題のとおり、各隊の集合写真がほとんどである。しかし、最初の集合写真は、第1次隊ではなく、その出発の年の3月に行われた乗鞍訓練合宿の参加者である。写真のタイトルは、「日本南極地域観測派遣隊乗鞍岳訓練」となっている。訓練期間昭和31年(1956年)3月20日～26日、人員は本部関係者18名、訓練班52名とある。撮影は鈴蘭小屋にて、3月21日。

この写真には、京大関係者・AACK会員が6名写っている(それに加え中尾佐助さんが参加)。そのひとり、平井一正さんがこの訓練について、笹ヶ峰会メーリングリストにコメントを投稿された(2016年12月)。お読みになった方も多と思われるが、当時の様子を語るにはそれ以上のものはないので、お許しを得て以下に引用する。

<平井さんコメント>

南極に関する話題に関して私から思い出の一言。

1956年(昭和31年)3月、南極観測がいよいよ開始されるに当たって、観測隊(当時は探検隊と言った)に参加の希望者の訓練が、乗鞍の位ヶ原小屋を中心に行われた。全国の大学山岳部、研究機関から52名の希望者が集まった。

京大関係者として、中尾佐助、川口章、伊藤洋平、山口克、北村泰一、平井一正が参加した。永田、西堀、鳥居などの幹部をはじめ、渡辺兵力、村山雅美など後に南極やヒマラヤで活躍する多くの人が集まった。このとき中尾さんが南極を希望されたことは興味深い。

訓練として何をしたかは覚えていないが、スキーで肩の小屋まで登ったりした。このとき中日新聞の取材ヘリが墜落して乗員全員が死んだことは記憶に生々しい。西堀さんに好印象を持ってもらおうと頑張ったが、芸無し猿は参加は不利といわれ、その後私は自動車の運転免許やタイプライターを練習した。山口と北村は東京に下宿し、南極事務所に通って準備を手伝った。結局このときの参加者で伊藤、北村だけが南極に行った。ちなみにチョゴリザはこの2年後である。

ともかく海外に出たい、ヒマラヤに行きたいと若い血が煮え立っていたときのことであり、南極に対する憧れと情熱は今では想像できないくらいであった。

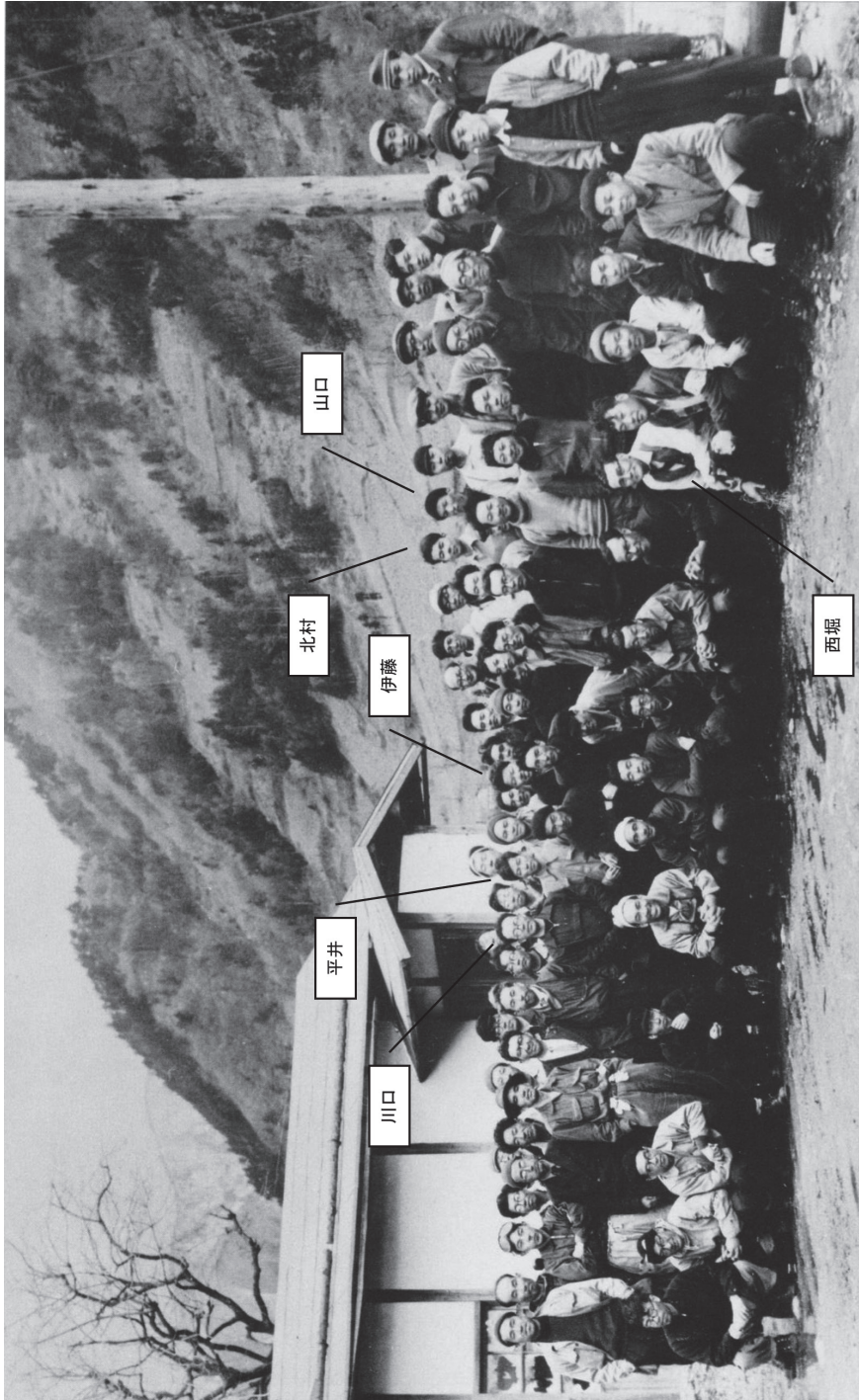
当時のことは記録として残っていないし、ほとんどの人は故人であるので、参考までここにコメントする。

当時の山岳関係者にとっては、未知に対する憧れと情熱をぶつけ、そして極限環境に対する知識・技術を発揮、活躍するには、南極はヒマラヤと並んで最高の舞台であったろう。一方で、南極観測を推進する上では、まず極地で生活し、安全に活動することが必要であり、それには山岳関係者の力が不可欠であった。そのため、第一次越冬隊長を務めた西堀榮三郎さんをはじめ、多くの山岳関係者が、もちろん登山等の経験豊富な研究者も含めて、観測隊に多数参加し、南極観測の安全に、そしてその継続発展に大きく貢献してきたといつてよいだろう。南極観測隊の積雪期の訓練は、少しずつ形を変えながらも、いまま乗鞍で行われている。

南極観測の開始から60年が経ち、基地や観測船、通信手段といった基礎部分は拡充改善されているが、南極の自然の厳しさに変わりはなく、したがって、そこで活躍できる人材は、いまま変わらず求められている。

文献

日本南極地域観測隊員総員集合 第1次隊から第25次隊まで 財団法人 日本極地研究振興会 発行 1984年11月8日



3月21日 鈴蘭小屋にて

訓練期間 昭和31年3月20日～26日
人員 本高関係18名 訓練班52名(7班)

日本南極地域観測派遣隊乗鞍岳訓練

立岩	吉川	田島	守田	佐伯(備)	楠	平島	渡辺	吉田(榮)	吉田(榮)	永田	西堀	栗原	仲田	緒方(通)
山縣	清水	朝比奈	中野	大瀬	安井	矢田	木崎	山縣	中村	松本	戸谷	庄司(伏)	菊池	山縣
山縣	中村	松本	戸谷	庄司(伏)	菊池	山縣	中村	松本	戸谷	庄司(伏)	菊池	山縣	中村	松本
山縣	中村	松本	戸谷	庄司(伏)	菊池	山縣	中村	松本	戸谷	庄司(伏)	菊池	山縣	中村	松本

写真は文献に示した「日本南極地域観測隊員総員集合」の3ページに、平井さんの情報により加筆した

近藤公夫君追悼

斎藤惇生

AACK 会員であった近藤公夫君が、昨年 2016 年 9 月 25 日、咽喉の悪性腫瘍で世を逝った。彼は近藤良夫元 AACK 会長の実弟だが、AACK 会員で面識のある者は少ないと思う。

1949 年入学の私は彼と農学部教養の 4 組 (A4) で 2 年間同級だった。当時の医学部医学科は教養 2 年を終了してからまた試験を受けて入学した。それで医学部志望者は、生物系の農、薬、理の教養に入学した。

公夫君は兄良夫氏の影響があったのか、旧制第三高等学校で山岳部員だった。愛称は兄がダイコン、彼はプチコンだった。これは小柄の彼に全くぴったりだった。

1949 年米占領政策により学制大改革が施行され、新制大学が発足して旧制の高等学校は廃止となった。京都の第三高等学校も同じ運命で終了、京都大学に合併の形になった。三高山岳部員で京大に進学したものは、全員一応京大高山岳部と合流した。実際に京大高山岳部員として活動したのは、山口克、広瀬幸治、兼松雄象、樋口明生の 4 人だった。近藤君は冬山で 400 米ほど滑落したことがあったためと聞いているが、山岳部には顔を出さず陸上競技部に入り長距離を走っていた。しかし彼は律儀にも卒業後 AACK に入り、最後まで会員であった。

教養終了後彼は林学、私は医学部に入り、会う機会は無かった。しかし 1962 年 5 月サルトロ・カンリ遠征でラウルピンディに着き、宿舍のメトロポールホテルに入ると近藤君がいた。聞くと日本庭園の造成に来ているとのことだった。パキスタン政府は当時首都をカラチからラウルピンディに移し新しい首都のイスラマバードの建設中であった。その一環として日本庭園が造成されたのではないかと思う。

メトロポールホテルは名前は立派だが、暑さをしのぐのに高い天井に大きな扇風機がブルンブルンとゆっくり廻っているだけだった。夏は 40～45℃ が当たり前のこの熱帯乾燥地に、いっ

たいどんな日本庭園を造っているのか興味があったが詳しく聞かなかった。ただ日本造園の代表として造成に一人で頑張っているのに「ようやっているな」と感心敬服した。

近藤君は 1965 年奈良女子大の助教授、'74 年には教授に就任した。造園学、公園、緑地、遺跡を含めた環境デザイナーの泰斗となり業績を残し、権威ある学会賞も多く受賞している。晩年には五稜郭保存整備委員長、奈良古都風致審議会委員長だった。

近藤君の家が向日市にあって、私の勤務する新河端病院に近く、20 年ほど 2～3 ヶ月に 1 回ほど健康相談と治療をした。2015 年 1 月ごろ咽喉の不快感があり耳鼻科受診、悪性腫瘍が診断された。放射線治療を受けたが病状はあまり改善せず進行、嚥下がだんだん困難になりアイスクリーム以外のどを通らなくなった。最後は自宅で夫人の手厚い看護を受けて大往生した。

葬儀は 9 月 27 日五条通のブライトンホールで営まれ、参列した。少し驚いたのは弔辞を読まれたのが、陸上競技部で近藤君の薫陶を受けた人で、内容は陸上部での思い出だけで学問的業績はあまり語られなかったように思った。全く陸上部主催の葬儀の感がした。

近藤君は陸上でも三高山岳部以来のプチコンのあだ名で呼ばれ、卒業後すぐ 1953 年から '60 年まで若くして監督となり、陸上は個人競技だが団体競技でもあるとの信念を部員にたたきこみ、綿密な記録をとって指導し、部員たちに恩師のように慕われた。神戸から平安神宮、びわ湖一周の大学駅伝では、最初から終点まで足こぎ自転車に乗って伴走し、選手を励まし続けた。今でも当時の部員たちの忘れられない語り草になっている。

近藤公夫君の御冥福を心から祈って擲筆する。

図書紹介

私のシュプールⅡ 山とスキー、人との出会い

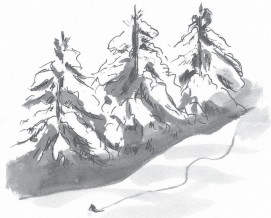
著者：芳賀孝郎 装画・挿絵：芳賀淳子

2017年2月17日発行 ISBN 978-4-86368-056-2 定価：本体 1500円＋税

横山宏太郎

私のシュプールⅡ

山とスキー、人との出会い



芳賀孝郎

芳賀孝郎さんの標記の本が出版された。「私のシュプールⅠ」の出版から約1年。一部に重複があるとのことのお断りがあるが、「Ⅰ」と同じく大変興味深い内容である。「Ⅰ」の紹介は、芳賀さんと50年以上のおつきあいがある平井一正さんにお願ひし、Newsletter No.77に掲載した。「Ⅱ」では、その平井さんが序文を寄せておられる。「Ⅱ」についても、どなたかおつきあいの深い方に紹介をお願いしたかったのだが、編集人の怠慢で原稿の期限が来てしまった。芳賀さんにはたいへん申し訳ないことであるが、あまり遅くならないうちに、ということもあり、編集人が簡単にご紹介することにした。

序文、まえがきに続く内容は以下のとおりである。

- 第一部 山とスキー
- 第二部 人との出会い
- 第三部 サービスと観光
- 第四部 宮の森だより
- 第五部 講演記録

まず巻頭に十数枚の貴重な写真、そして楽しいような写真がある。これだけでも、芳賀さんのご活躍とおつきあいの広さに加え、お人柄もわかるような気がする。

第一部では、山と登山に対する基本の姿勢をあらためて学んだ。「山に残した忘れ物ー自然を考える」では自然の中のゴミの問題について重要な指摘をされている。最近の私自身は、若い頃の悪事を反省し、自然の中でゴミを目にすると極力拾って帰るよう心がけているが、さらに努力したい。「宮様の登山について」では日本登山史のなかの宮様方の足跡を知ることができた。

第二部では、大先輩方の人となりがかうかがわれ、第三部ではサービスのプロたちのはなしとスキー観光への提言が語られる。第四部は奥様、淳子さんの筆になるが、平井さんが「彼女の存在はどれほど彼の人生を豊かにしているか、はかりしれない」(序文)といわれるのがよくわかる。第五部にも興味深いお話が続く。

私がいちばん羨ましく思ったのは、荒井山のスキーの話である。2011年に、便利で暖かい千葉・幕張のマンションから札幌・宮の森に戻られたのは、山スキーを楽しむためだった。かつてはリフトのあるスキー場だった荒井山は、いまはリフトは撤去されて、芳賀さん専用のスキー場となっている。「私は新雪が降ると、小学生時代と同じように玄関先からスキーで荒井山に向かうのである。(中略)荒井山は、私のスキーの故郷である。」と締めくくられる文に、新雪に描かれた見事なシュプールの写真が添えられている。

これからも、お元気で山スキーを楽しまれるとともに、興味深いお話、教訓に富むお話をさらに聞かせていただきたい。

会員動向

編集後記

巻頭には、日本山岳会関西支部の登山隊に参加し、ネパール東部のナンガマリⅡ峰の初登頂を果たされた森本悠介さんに、登山の概要と印象などを書いていただきました。初登頂、おめでとうございます。得ることも多かったことで、今後が期待されます。

79号、80号の南極観測60周年記念特集に続き、81号でも関連の話題を載せています。

1月29日には東京・立川市の国立極地研究所で昭和基地開設60周年の記念式典がありました。式典会場と昭和基地は衛星回線で結ばれており、昭和基地からは越冬隊長として樋口和生さん(故・樋口明生さんのご子息)もメッセージを述べられました。樋口さんは2月1日に次の58次隊に越冬を交代し、3月に無事帰国されました。この号が発行される頃、昭和基地は太陽の出ない極夜の時期を迎えています。

発行の遅れはおかげさまでだいぶ取り戻すこ

とができました。引き続きご協力よろしくお願
いいたします。

横山宏太郎

次号原稿締め切り 2017年7月16日

原稿送り先：横山宏太郎

発行日	2017年5月31日
発行者	京都大学学士山岳会 会長 松沢哲郎
発行所	〒606-8501 京都市左京区吉田本町(総合研究2号館4階) 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究 研究科 竹田晋也 気付
編集人	横山宏太郎
製作	京都市北区小山西花池町1-8 (株)土倉事務所